様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月 １８ 日現在

機関番号：３２７１１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2016～2020
課題番号：１６Ｋ１７２５３

研究課題名（和文）都市における先住民の相対的底辺化―サマ・バジャウの労働と生活

研究課題名（英文）Bottomization of Indigenous People in Urban area: The case study of work and life of Sama bajau in Manila

研究代表者
吉田　舞（Yoshida, Mai）

フェリス女学院大学・文学部・研究員

研究者番号：５０６０１９０２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、フィリピン・マニラ首都圏で暮らす先住民バジャウの相対的底辺化について明らかにした。フィールドワークでは、マニラの観光地やショッピングモール内外、公設市場などで生計を立てるストリート・ベンダー（路上・通路での物売り）の生活と仕事の実態調査を行った。その結果、都市開発の下での空間のジェントリフィケーションが、ストリートベンダーの仕事と生活を直撃し、ベンダー間の階層を細分化していることが明らかになった。さらに、バジャウのベンダーに関しては、ベテランからニューカマーまで、ベンダーの階層の中でも、相対的に検挙の可能性が高く収入が不安定な底辺に位置していることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の学術的・社会的意義は、都市における労働分析を先住民の労働に着目して行ったことである。近年、都市への移動が増加しているバジャウは、政策においても、学問においても注目されることが少なく、その実態が知られないまま「路上生活者＝犯罪者」という烙印を押され、都市からの排除の対象となってきた。しかし、バジャウは路上の物売りとして、都市の労働市場の底辺を構成し、都市経済を下支えしてきた。本研究では、その生活実態を明らかにし、都市政策が底辺層に与える影響を分析した。これは、途上国都市の分析に留まらず、資本や国家主導の都市作りが底辺層に与える問題として、他国の都市や労働変容の分析にも応用が可能である。

研究成果の概要（英文）：This study clarifies the "bottomization” of Sama-Bajaus in Manila, Philippines. The research was conducted in the national park, shopping malls, public markets, and other streets to clarify the living situations of street vendors in Manila. The gentrification of public space under development programs is directly hitting the work and life of street vendors. As a result, the study examined the rapid stratification of street vendors in Manila. In addition, Bajau vendors were relatively at the bottom of the vendor hierarchy, from veterans to newcomers.

研究分野：労働社会学

キーワード：先住民　都市底辺層　階層化　ストリート・ベンダー　労働と居住　相対的底辺化　インフォーマリティ　グローバリゼーション

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究は、フィリピン・マニラ首都圏における先住民サマ・バジャウ（以下、バジャウ）の生活を通して、都市労働の分析を行うものである。バジャウはフィリピン南部ミンダナオ島に住む先住民（サマ語系海洋民）である。1970 年代以降、フィリピン政府からの分離独立を求めるムスリム勢力と国軍の武力衝突が激化し、戦争難民になったバジャウが仕事と住居を求めて、マニラをはじめ地方都市に移住している。とくにバジャウは、社会運動の主体としての声または政治的影響力が弱く、差別の実態や困窮した生活が解決すべき問題として社会問題化されることは少ない。その中で、マニラでは実態が知らされないまま「バジャウ＝物乞い＝犯罪者」という、エスニシティに付与された負のイメージに伴う偏見が浸透している。このような環境のなか、彼ら彼女らは都市の労働市場の中で、現金収入を得るようになったが、その多くは、雇用労働ではなく、路上で行商をしたり、物乞いとして生計を立てている。一方、グローバル都市の形成を目指すマニラの都市政策は路上の人々の生活を直撃した。研究開始当初は、マニラの都市政策のなかで初めて試験的にホームレスやバジャウに対する福祉事業が始まったタイミングでもあった。このような背景のもと、都市のバジャウを調査対象とし、その仕事と生活の実態を明らかにすること、そして、それらのデータを社会学的に分析することで、マニラの都市の動態を都市底辺からとらえることが可能であると考えた。

２．研究の目的

本研究の目的は、フィリピン・マニラ首都圏の（下層）労働市場の構造を、バジャウの事例を通じて分析することである。フィリピンでは、近年、地方が都市化し、都市内部での貧困層の形成が進み、地方からの移住者が減少傾向にある。これに対して、地方の労働市場に包摂されない先住民の都市部への移住は増加している。しかし先住民は、移住先で労働市場の底辺部に組み込まれ、その生活は窮乏化している（「相対的底辺化」）。本研究では、このようなバジャウの労働に焦点を当て、都市開発が底辺層に与える影響について考察した。

３．研究の方法

本研究では、マニラ首都圏及びその近郊の、スクオッター（不法占拠居住地）及び路上で生活する先住民バジャウと彼ら彼女らの同業者を対象に参与観察とインタビュー調査を行い、都市先住民の「相対的底辺化」の実態について明らかにした。２で述べた研究目的を達成するため、以下の方法で研究を行った。

（１）バジャウがマニラの労働市場のどの部分に組み込まれるかを明らかにするため、マクロな視点から、バジャウではないベンダーや近隣住民、同業者の実態調査を行った。具体的には、生活史法を用いて、初職、最長職、現職について、それらの就労ルートや、仕事の内容、雇用条件、労働に対する価値などに関するインタビューを行った。また、ベンダーの労働環境を確認するため、露店の客や店番としての参与観察も行った。

（２）政策：都市開発政策及び貧困対策についての政府の政策・事業を分析し、バジャウと路上の人びとを取り巻く外的条件を明らかにした。具体的には、行政資料や文献研究のほか、先住民支援をしているＮＧＯや労働組合などへの訪問インタビューを行った。以上により、都市における先住民の労働と生活の「相対的底辺化」について考察した。

４．研究成果

（１）ニューカマーの実態調査：初年度は、都市の先住民をめぐる生活環境と政策、支援の実態を把握するため、当事者および関係者と面談し、本調査にむけての調整と準備を行った。その後、先住民を含むストリート・ベンダーのマニラの状況を把握するため、ベンダー組織を介して国立公園や観光街での路上の屋台及び行商人のインタビューおよび、参与観察を行った。これらの調査では、マニラのなかでも情報が少ない先住民の集住地の概要を知るために、現地 NGO に協力を要請した。現地調査では、マニラ首都圏および郊外の先住民の集住地を 5 か所ほど訪問し、マニラに出てきた経緯や仕事、生活環境などの調査を行った。ここでは、ニューカマーと長期移住者との間で棲み分けが行われていること、同じベンダーでも販売場所や居住環境が全く異なることが明らかになった。また、各バジャウの集住地区の行政関係者らと面会し、先住民支援や非先住民の住民との関係性について、地域内での共存・包摂が進んでいる地域があることも確認できた。

（２）長期移住者の実態調査：マニラ首都圏内のスクオッター（不法占拠地区）で生活するバジャウとその関係者（おもに近隣住民）に仕事についての聞き取り調査を行った。計画当初は二年目に同調査地にて本調査を行う予定であったが、フィールドワークの前日に火災が起こり、対象者の多くが家を失った。地方や親戚宅に一時避難する家族も多く、予定していた調査を実行することが困難な状況となった。しかし、急遽、援助活動に参加したことで、災害時のバジャウ間および非バジャウとのネットワーキングや、NGO や自治体、行政の支援者らとの関係性などを参与観察することが可能となった。また、この火災元がバジャウ相手の高利貸しであり、資産が燃えていたことが判明し、スクオッター内での経済格差や、従来の過剰都市化論のなかで指摘されてきた、「貧しい者がスラムに住む」という社会階層と居住階層の相関関係が必ずしも当てはまらないことが確認できた。

（３）都市開発を生き抜く戦略：2 年目以降は、ストリートで露天商や行商人、モール内の屋台や、市設市場で店舗を借りている個人ベンダーへのインタビュー調査を行った。この結果、路上使用の規制取り締まりが厳しくなり、フィールド調査地では、路上で寝起きしていたバジャウが減少していたことが明らかになった。また、先住民の集住地区の市場周辺にある家族経営によるハラール・フードの食堂にて参与観察を行った。この調査では、顧客の多くがバジャウのストリート・ベンダーであったことから、現在の彼ら彼女らの仕事や、出身地ミンダナオからマニラに出てきた経緯、結婚や職歴などの生活史について話を聞くことができた。また、警察や行政による検挙の状況なども確認できた。これらにより、都市開発と観光開発が進み、空間管理が厳格化するなか、ベンダーらがいかに生業を続けているか、歩き売り、露天商、賃貸店舗など、さまざまな環境下での状況が明らかになった。さらに、ベンダーをやめたバジャウの中には新しくインターネットを通じた仕事にシフトしている人もおり、中間層を対象としたバイクタクシーやバイク配達など、新たな都市の底辺労働が出現し、職業の多様化・階層化の傾向も確認することができた。

（４）新型コロナ感染症の底辺層への影響：新型コロナウイルス感染症の拡大防止対策のため、2020 年 3 月以降、フィリピンでの現地調査を行うことができなかった。最終調査では、これまで収集したデータの確認および、バジャウのベンダーのフォーカス・グループ・ディスカッションを予定していたが、現地協力者と連絡を取り、10 組のバジャウのベンダーに対して生活史調査を行った。さらに、フィリピン全土でのロックダウンに伴い、10 か月近く路上での販売ができない状態が続いたが、2021 年 2 月に営業を 2 週間程再開した観光地のベンダー10 組に、質問

票を使ってコロナ前後の売り上げや物売りのスタイルについて遠隔調査を行った。しかし、その後すぐに行政により露店は強制撤去された。調査の結果、観光地では、売り上げが 10 分の 1 に減り、ロックダウン中も必要な福祉サービスや相互扶助ネットワークからこぼれ落ちているケースが多く確認できた。もともと、露天商など、路上や街路で商品を販売するストリート・ベンダーが福祉の対象になることはなく「違法行為者」として検挙の対象になることは珍しいことではない。しかし、この度のコロナ禍では、感染対策の名の下、これらのベンダーは、都市空間から完全にロックアウトされた。一方で、スーパー、公設市場のテナントは、人びとに食料を提供するために営業を許可されている。今回のようなパンデミックは、このようなベンダー間の差異をむきだしにした。

（５）都市底辺労働の階層化：本研究では、質的調査を通じて、ストリート・ベンダーのミクロな経験から、労働分析を行った。ここから、都市のなかで、ベンダーの階層を形成するさまざまな要因を明らかにした。

表１　　ストリート・ベンダーの階層的特徴

	店舗の特徴	主な販売場所	ベンダーの属性	居住の特徴
①	資本系 備え付け簡易店舗	CDB/市場／モール敷地内／高架鉄道駅構内	雇われ店番、夫婦、ムスリム	一般地区、スラム地区持ち家および賃貸
②	露天商 備え付け可動式店舗	公園敷地内	家族連れ、夫婦	スラム地区、店舗住込み
③	福祉系ベンダー 折り畳み式／オンライン	公設市場、街路	家族連れ、夫婦	スラム地区賃貸
④	露天商 可動式、折り畳み式	公園・市場外、観光地・教会周辺・学校・駅周辺・その他街路	夫婦、家族、女性、ムスリム	一般地区、スラム地区持ち家および賃貸、路上
⑤	行商人（座り売り・歩き売り）移動範囲が狭い	モール・公園出入口、市場、観光地・教会周辺・学校・駅周辺・	ベテランベンダー、子ども、障がい者、高齢者、先住民	スラム地区、路上
⑥	行商人（歩き売り）移動範囲が広い	郊外、繁華街以外の路上、住宅街	新規参入者、男性、単身者、先住民	スラム地区、路上

表１の①と③からは、国家と資本がストリート・ベンダー業に参入していることがわかる。これまでは排除の対象とされてきた路上での販売行為は、今では一定の条件を満たすベンダーの特権となっている。一方、都市の美化政策やコロナ対策などの名目により、その他のベンダーが公共空間から排除の対象となった。この結果、労働階層の下降圧力が強まっていることが明らかになった。このように、都市開発の下での空間のジェントリフィケーションは、ストリート・ベンダーの仕事と生活を直撃し、ベンダー間の階層を細分化している。そして、この末端（⑤⑥）にいるのがバジャウのベンダーである。バジャウのベンダーに関しては、ベテランからニューカマーまで、ベンダー間の階層の中でも、底辺に位置していることが明らかになった。本研究では、以上を以て、フィリピン・マニラ首都圏で暮らす先住民バジャウの相対的底辺化と、都市開発の関係を明らかにした。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 吉田舞	４．巻 32
２．論文標題 公共空間とストリート・ベンダーのポリティクス―マニラの国立公園の事例から	５．発行年 2019年
３．雑誌名 解放社会学研究	６．最初と最後の頁 31―50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 吉田舞	４．巻 9
２．論文標題 ジェントリフィケーションと都市底辺労働の階層化―マニラのストリート・ベンダーを事例として	５．発行年 2016年
３．雑誌名 理論と動態	６．最初と最後の頁 55―72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 吉田舞	４．巻 38
２．論文標題 労働のインフォーマリティ再考 ―マニラのストリート・ベンダーを事例として―	５．発行年 2020年
３．雑誌名 日本都市社会学会年報	６．最初と最後の頁 65-81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　2件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 MAI YOSHIDA
２．発表標題 Informality of labor in urban space: a case study of street vendors in Malate
３．学会等名 International Research Forum on the Philippines 2019（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 吉田舞
２．発表標題 都市インフォーマリティ再考―マニラにおけるストリート・ベンダーの事例より
３．学会等名 第37回日本都市社会学会大会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 吉田舞
２．発表標題 公共空間と下層労働のポリティクス:マニラのストリート・ベンダーの事例から
３．学会等名 日本労働社会学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 吉田舞
２．発表標題 下層労働とインフォーマリティーマニラのストリート・ベンダーを事例として
３．学会等名 第33回日本解放社会学会（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 吉田舞
２．発表標題 ジェントリフィケーションと都市底辺労働―マニラのストリート・ベンダーの事例から
３．学会等名 第21回 フィリピン研究会全国フォーラム
４．発表年 2016年

１．発表者名 YOSHIDA, Mai
２．発表標題 Gentrification and stratification of street jobs in an urban setting: The Case study on Bajaus in Manila
３．学会等名 Symposium on Structure and Transformation of Urban Bottom of Metro Manila
４．発表年 2016年

１．発表者名 吉田舞
２．発表標題 非失業を生きるーマニラにおける先住民の相対的底辺化の考察へ向けて
３．学会等名 第６回 アジア社会学研究会
４．発表年 2016年

〔図書〕　計1件

１．著者名 吉田舞	４．発行年 2018年
２．出版社 風響社	５．総ページ数 294
３．書名 先住民の労働社会学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

特定非営利活動法人 社会理論・動態研究所 2016年の活動 https://www.istdjapan.org/%E6%97%A5%E6%9C%AC%E8%AA%9E%E3%83%88%E3%83%83%E3%83%97/%E3%81%93%E3%82%8C%E3%81%BE%E3%81%A7%E3%81%AE%E6%B4%BB%E5%8B%95/2016/

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関